

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 石川岳彦

燕国は西周時代から春秋戦国時代に、中国の華北から東北地方にかけて存在していた強国である。鉄器の導入など弥生文化の形成史を東アジアの枠組みのなかでとらえる面からも、燕国の考古学的研究の重要性は増している。しかし、その前提となる燕国の遼西、遼東への進出の実年代は、燕の將軍秦開により前 300 年に成し遂げられたとする文献上の記載が定点とされ、考古学的な資料の不足も手伝って、あまり検討されることがなかった。石川氏の学位申請論文は、こうした今日的課題に応えたものといえよう。

第 1 部は、方法論的な基礎として重要な編年を、精緻に行っている。

青銅礼器および土器礼器が副葬された春秋戦国時代の燕国墓の研究は、青銅器と土器の編年と実年代の基準を確立したにとどまらず、燕国社会の構造も明らかにしている。代表的な青銅武器である燕式の戈についても型式と銘文の検討を行い、遼寧式銅戈が前 4 世紀に燕国の銅戈に影響を与えることで燕国の銅戈が複数の系統に分化していくことを見通した。これは、この時期に燕国が遼西地域に進出していくという新見解の布石となっているが、本論文の中でもとくに独創性の高い分析である。燕の勢力図を知るうえで重要な資料である明刀銭の各型式の年代をより絞り込んだことも評価できよう。

第 2 部は、第 1 部の基礎的分析を踏まえ、燕国の遼西、遼東地域への拡大に議論が及ぶ。

遼西の袁台子遺跡を中心とする墓と燕国中心部の墓を比較し、燕の遼西への進出をこれまでの前 300 年頃から前 4 世紀前半に引き上げた。そしてそれが燕国の有力支配層によって成し遂げられた一方、在地勢力との相互交渉の結果であったという、燕国の東方進出の仕組みにまで議論を高めた点に意義がある。つまり、燕国の積極的な東方進出が、一部に地域性を温存しながら進行したことを描き出し、領域の拡大の実態やより東の地域への影響を考えるうえで重要な視点を提供することになった。

さらにより東の遼東への進出の年代およびその実態の検討を行い、遼東でも平原部には遼西よりあまり遅れることなく前 4 世紀前半にはその勢力を広げ、前 300 年頃には遼東山地を除く遼東の広域に支配は及んでいたとする。同時期に鉄器も遼東に及んでおり、弥生文化において重要な鉄器の出現年代が前 300 年をさかのぼる可能性を示唆している。

本論文は、春秋戦国期の燕国の考古学的資料を丹念に分析することによって、燕の東方進出についての通説を覆し、この時期におけるあらたな東北アジアの歴史像を打ち立てる基礎を築いた点に意義がある。遼寧地域における燕国支配の実年代は従来と大きく異なるので異論も多いことが予想され、さらに自説の強化に努める必要がある。また支配の実態解明が不十分であるのは否めないが、それは資料が不足していることに起因しており、今後の研究に期待する。以上、本委員会は本論文が博士（文学）の学位を授けるのに十分な水準にあると判断した。